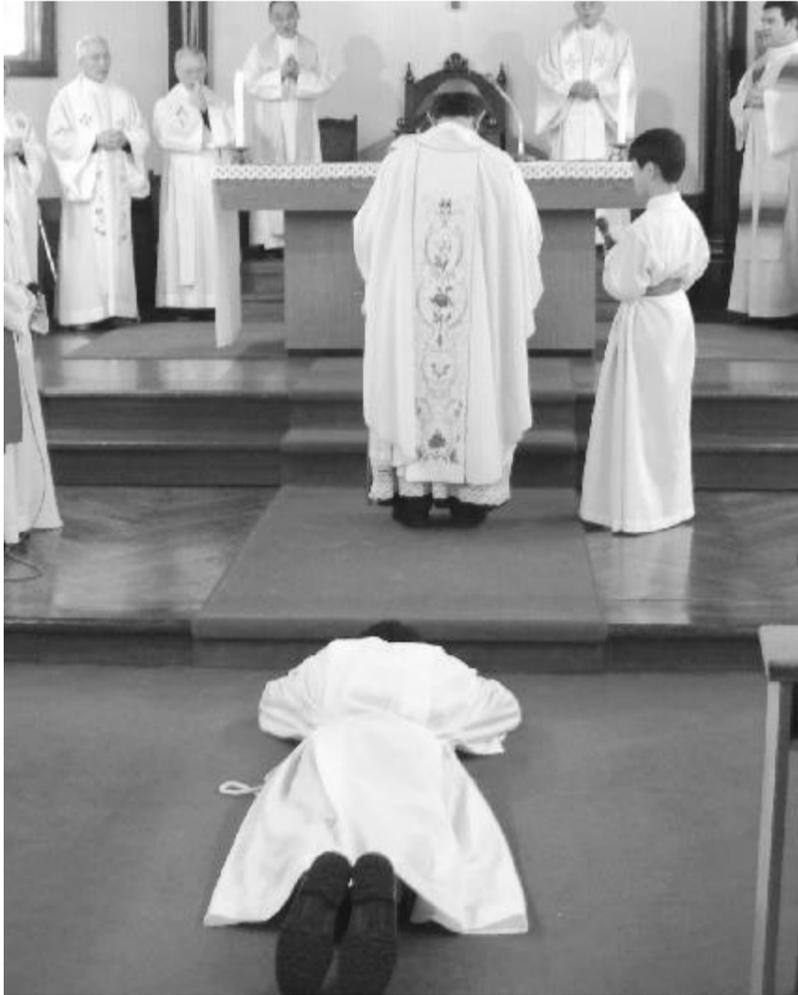


# = 忠実なよいしもべよ あなたの主人と喜びをともにしなさい =



三月二十一日(火)春分の日の祭日に、札幌教区として待望のミカエル森田 健児神学生の助祭叙階式が、カテドラルにおいて地主敏夫司教の司式で執り行われた。当日は、横浜や東京から参加された神父様方や、教区内の司祭団を始め、聖堂には修道者や信徒が溢れ、喜びと感謝のうちにミサを献げた。

## 札幌教区として七年ぶりの

## 助祭叙階式行われる



発行所

〒060-0031

札幌市中央区北1条東6丁目

カトリック札幌教区事務局

編集責任：教区報編集委員会

TEL 011-241-2785

FAX 011-221-3668

第107号

そして、助祭は弟子の中で仕える者となられたイエス・キリストの奉仕者なのだから、心から神の意向に従い、主に對するよつに、人々にも愛と喜びをもつて仕えること。二人の主人には仕えることが出来ないこと。昔



助祭の務めを説く司教様と森田神学生

地主司教様は、助祭の務めについて、「助祭は聖霊の賜物によつて強められ、全ての人に仕える者として、み言葉と、祭壇と、愛の奉仕によつて、司教とその司祭団を助け、主の御からだに御血を信者に授けること。司教から派遣されて、信者にもよいすすめを与え、神の教えを説き、祈りを司式し、洗礼を授け、結婚式に立ち会つて祝福し、臨終の人に聖体を授け、葬儀を司式すること。

助祭は、使徒から伝えられた按手によつて聖別され、祭壇に固く結ばれるのであつて、司教あるいは主任司祭の名において愛の奉仕を行うこと。全ての務めにあつて助祭は神の助けのもとに、仕えられるためではなく、仕えるために来られたキリストの誠の弟子であることを示してもらいたい」と説かれた。



お祝いの歌を歌う神学生たち

その後、隣接する聖園幼稚園で祝賀会が行われ、楽しく有意義な一時を過ごした。

その後、森田神学生は司牧的愛のしるしである、世に豊かな実りをもたらす特別な泉である独自の決意を表明した。

その後、森田神学生は司牧的愛のしるしである、世に豊かな実りをもたらす特別な泉である独自の決意を表明した。そして、受階者はひれ伏し、参列者と共に諸聖人の連願を行つた後、聖別の祈りを受け、終わりにストラを左の肩から掛け、ダルマチ力を着て助祭に叙階された。

この日、助祭叙階式に先立ち、ヨゼフ加藤 鐵男神学生の祭壇奉仕者選任式が行われた。地主司教様は、祭壇奉仕者の務めについて、「特別な場合は、病人を含めて信者に聖体を授ける務めを託されることがあるため、聖体の秘跡といけにえに、層深く一致するように務め、日々キリストを通して自分自身を父である神にささげるよう努力すること。キリストのからだ、神の民を、特にその中でも弱い人や小さな人を大事にし、キリストの愛の教えを実行するよう心掛けてほしい」と訓話された。

加藤神学生は、助祭叙階を目的の当たりにし、一年後に自分も叙階の恵みに預かることが出来るよう勉強にいそむこと、四年前の神学校へ入る時の、神父様方から頂いた励まし(?)の言葉のエピソードを紹介し、会場の笑いを誘いながら、司祭叙階までの自らの決心を熱く語り、皆様のお祈りと励ましをお願いした。



祭壇奉仕者に選任される加藤神学生

### 加藤神学生 祭壇奉仕者に選任

聖香油ミサ四月十一日の  
聖火曜日に行われる



聖香油の祝別

毎年、聖香油のミサで、司祭は心を合わせて、自分の司祭職の更新をします。その更新の中に司教への従順も含まれております。ご存じの通り司祭は司教の司祭職にあずかって司祭となります。従って司祭と司教というのは秘蹟的なつながりを持っています。

今回は、「教会法」から、聖香油ミサの持つ意味を考えてみます。教会法375条ではこういう風に言っています。「司教は神の制定にもとづき付与された聖霊によって使徒の座を継ぐ者であり、教理の教師、聖なる礼拝の司祭及び統治の奉仕者になるように教会の牧者としてたてられる」。すなわち、司教は使徒の座を継ぐ者、ペトロとその仲間、すなわち使徒達の跡を継ぐ者であり、この2000年間カトリック教会は統治の形は時代によって変わってはいても、司教によって統治されてきた事実

があります。

375条には「教えに関して」、それから「典礼に関して」「そして「司牧の方針に関して」、司教は絶対の権威を有していると教えています。故に、この三つの点に関して、司祭は基本的な司教のものの見方に同意し、従順である必要があります。あるいはそれを一緒に守っていく必要があります。

また、教会法495条では次のように述べられています。

「各教区において、司祭評議会すなわち司教の諮問機関として、司祭団を代表する司祭の集団が設置されなければならない」。この文書の示す意味は、司祭は司教と共に、司教は司祭と共に教区に奉仕しなければならないということ。最後の決断は司教がやるとしても、司祭団の重みということを教会法は訴えております。同時に、司祭職にも司教への従順、司教への恭順というのは何であるかということをお教えてくれています。それは、何でもすべてにおいてではなく、教区の霊的奉仕に於いては必ず司教と一致していかないといけないということです。

司教と司祭評議会が、一致して決めた方針に対する従順なのです。そしてその方針というのは、先ほど述べた「教えに関しては」、「典礼に関して」、それから「司牧の方針に関して」です。これらを司祭評議会は決め、そしてそこで決定したことに従順があるのです。従順というのはこれらの諮問機関を通して示された司教の意向への従順です。

司教と司祭はこの三つの点に関して一つになる。このことが教区が伝えていく2000年の知恵ではないでしょうか。司教と司祭団は共に一つの方針を共有する従順が求められるといえます。

司祭異動

左記の通り司祭人事の異動がありました。信徒の皆さん宜しくお願いします。

北見地区(2006年3月1日付)

・網走・美幌教会担当

プボ・アルフォンソ 師

(六本木聖ヨゼフ修道院)

(フランススコ修道会)

旭川地区(2006年4月1日付)

・稚内・枝幸教会担当

間野 正孝 師

(フランススコ会川崎分院)

(フランススコ修道会)

なお、間野神父の住居は旭川フランススコ修道院となり、旭川市内教会の協力者となります。

新教区神学生誕生

「苗床に新しく芽」

神学生養成担当司祭 中江 洋

例年になく豪雪のように思われた冬も、割に雪解けも早く、春の到来と言う所でしょうか。

日頃から、神学生育成のために、一粒会その他の霊的ご支援を頂き、皆様には深く感謝致しております。

司祭・修道者の高齢化、召命の減少等と、本教区に於いても叫ばれて久しくなりましたが、今

年、四年振り、一人の青年が司祭職の志をもって神学校に入学することになりました。教区にとりまして大変喜ばしいことだと思えます。名前は、小野幌教会出身の神能(じんの)和己(26歳)君です。当人についての詳しいことは、彼自身の文中で紹介されると思っています。

私も、かつて、小野幌教会の主任司祭をしていたことがありますが、彼がお母さんと二人の妹さん達と一緒に教会に来ていたのを懐かしく思い出します。彼はまだ小学校低学年でしたでしょうか。彼は幼児洗礼で、母方の曾祖母以来の信仰の系譜の中で育って来たそうです。フランススコ会士、ニコラ神父様、ローター神父様方のご指導によるものだそうで、心から両師に感謝致しております。

彼が「司祭になりたい」と私も(養成担当司祭)の所へ来ましたのは、園芸関係の大学を卒業して割と間近な時でした。その時は神学校入学最低年齢(22歳)に未だ達していませんでしたので、その訳を告げ、まだ非常に若かったので、もう少し社会的経験を積んで人間的にも成長してほしいとの願いのもとに、少し待たましようということ。霊的指導や、海外研修等も含めて、それとなく様子を見て参りました。

しかし、彼の司祭職への志は強く、昨年、司教様の許可も出た神学校側の面接、試験にも合格しましたので、本年4月から入学の運びとなりました。

ところで、神学校のことをラテン語で「セミナリウム」と申しますが、これは元々「苗床」の意味でもあります。春の到来と共に、一つの種が苗床で芽を出そうとしております。ご存知のように、神学校入学は即、司祭になることではありませんので、これからの神学校生活を通して、彼なりに司祭への道を目指して育って行くことを願っております。

最後に、大切な一人息子を献げて下さったご両親に感謝すると共に、二人の先輩神学生ともども、祈って頂きたく重ねてお願い致します。

「神学校入学にあたって」

神能 和己



この度の神学校入学にあたって、まずは今まで私の為に祈って下さっていた家族、親族、友人、そして各教会の信者様方に心から「ありがとう」とお礼を申し上げます。そしてまた、「これからはより多くのお祈りをよろしく願います」と改めて申し上げます。

「祈り」この言葉で表される意味が私にはまだまだ理解出来ていませんが、「必要である」という事を今、大いに感じています。

す。

私の事を知る人であれば誰もが感じる事、それは「大丈夫なの？ちゃんと続けられるの？」ではないでしょうか。実を言うと私自身、それに対する「自信」というものは20歳の時にこの道を希望して早6年が経った今も持ち合わせてはいません。自らの召命が本当に司祭への道なのか、もしかしたら間違いじゃないのかと内心ビクビクしています。そういう時、最も必要なのが「祈り」なのだと思最近ようやく気づくことが出来ました。

これから行く神学校はただ黙々と勉強をしているだけでは決して司祭までの道に辿り着けない所です。祈りの中で神と会話しながらゆっくり、ゆっくりと後を確かめながら歩みを進めていく、そんな所なのではないかと私は思っています。

「司祭になつたら何に力を注ぎたいですか？」こんな質問を最近聞くようになりました。その答えを簡略化してお答えすると、「若者」になります。

この「若者」とは、教会に来る若者、教会に行く「理由」を見出せなくなった若者、現代病と言われている鬱、ひきこもり等、心の病で苦しんでいる若者、家庭問題に苦しむ若者等を意味します。10年前と比べ、各教会に若い世代の姿があまり見られなくなってきました。高齢化社会でこれからはますます若者の力が必要な教会にとってこれは大きな問題だと思えます。

また、若い世代に多く見られる現代病と括られている様々な問題は解決できないまでも専門

的な分野を理解した上で神父として教会の青年たちだけでなく一般の青年たちとも関わっていき、事何かの力になれるのではないかと思っています。

これからの6年間、勉強に翻弄され、人間関係などで心身的に傷つくなど続けるのが辛く思う時が多々あるでしょうが、ほどほどに頑張りながら神との会話を欠かすことなく、日々の生活を大事にしたいと思っています。

全てが神の御旨のままになりますように。

### カトリック高校生会 練成会を開催

カトリック高校生会とは、もう30年以上続いている会で、毎年この練成会に参加した高校生を中心に執行部が生まれ、青少年担当司祭の指導を受けながら、毎年、夏のキャンプや春の練成会を行っている会です。



担当司祭の訓話風景

その練成会が3月27日～30日に旭川カトリックセンターにおいて行われました。今年のテーマは「十代の輝け

るstep up」で、テーマも内容も執行部の高校生達が考えています。今回は、このテーマのもと「家族」について日常生活で見落としている家族との絆、日常生活であまり意識する事が少ない点に焦点を当てました。

練成会の内容は、札幌の青年を中心としたリーダーがオブザーバーとしてグループに付き、その中で各グループに分かれてのグループワークでの分かち合いを中心に、全体会での参加者の「家族」もしくは「大切な人」についての意見交換や、旭川で司牧なさっているフランシスコ会渡辺神父様の様々な家族の姿や絆の講話、フィリピンにて活動中の祐川神父様の施設、イースタービレッジに半年間ボランティア活動に行っていた、北広島教会青年の鈴木晴美さんの経験をもとにした講話等を行いました。

3泊4日という短い期間の中で、高校生という多感な時期に北海道各地の同世代の高校生と交流し、試行錯誤しながらも自分で考え、同じグループのメンバーがどういった思いを持っているのか、そういったお互いの意見を交換し合い、本音で分かちあつていく、という事はとても大きな事だと思えますし、高校生達にとってもこのような経験をした事で大きく成長していく事だろう、と思います。

私も高校生の時、この会や執行部を経験し、10年以上たった今でもこの経験は大きな財産となつていますし、出会った沢山の仲間達とは今でも交流が続いています。少子化の問題や部活

学校や塾の講習等により、参加者の数が年々減少しつつありますが、今後、少しでも多くの高校生達がこの練成会に参加し、多くの同世代との出会いを経験して欲しいと願っています。



参加した高校生たち

(リーダー 北26条教会 今野恒輝)

### 練成会を終えて

岡澤 まどか

3月27日から30日まで旭川カトリックセンターでカトリック高校生会の練成会が行われました。私は去年に引き続き2回目の参加でした。

今回は執行部として、この練成会を企画してきました。参加者が、そして自分自身が楽しめるような、ステップアップ出来るような会にしたいと思っていました。

4日間、3グループに分かれてセッションをしました。セッションの内容は「家族」でした。普段、当たり前のようにそばにいる家族について、グループの人がそれぞれに自分の思う家族像や漠然と家族という言葉からイメージできる事を話し合いました。

私達のグループは全員が心から相手の意見を受け容れて共感したり、納得したり出来ました。一番印象的だったのが、家族の「絆」です。普段生活していて家族という存在は当たり前だつたのですが、絆によって結ばれていると言う事に気付かされました。加えて2日目の渡辺神父様の様々な家族についての講話、3日目の鈴木晴美さんのフィリピンの孤児院での経験の講話を聞き、自分たちがいかんにか恵まれた環境にいるのかを実感しました。

家族や大切な人との関わりの中でその間にある絆や信頼、愛は目に見えない、大切なものは目に見えない、そして必ずしも普通である事が当たり前ではないという事をそれぞれが実感して練成会を終える事が出来ました。私自身、この練成会で学年、居場所の違う様々な高校生と接し、意見をぶつけ合うという事を通して一歩前進出来た気がします。この練成会で得た物をこれから始まる大学生活に生かす事が出来れば、と思います。

私を成長させてくれたみんなにそして講話をして下さった渡辺神父様、鈴木晴美さん、リーダーの方々、エムリク神父様、地主司教様、そして神様に感謝しています。



### 「第三八回カトリック幼稚園新任教職員研修会」開催

平成十八年三月二七日 二九日に藤学園セミナーハウスで開かれる

残雪の山に太陽の光が射し春の息吹きを自然界から感じる頃、幼児教育を志し、希望に溢れる若い先生の卵二十九名が、藤学園セミナーハウスに集い、二泊三日をかけて、カトリック幼稚園の保育者として四月からどのように子どもたちとその父母とにかかわり、キリストの心を伝えていくかについての道標を学びました。

第一日は、三時より開会式が行われ、北カ幼稚園長の久野神父様が、カトリック幼稚園の保育者としての子どもとのかかわりの大切さと情熱の必要性を話されました。

第一講義は、中標津カトリック幼稚園長のナルチゾ・カヴァツォラ神父様による「カトリック幼稚園の特徴と使命」で、神父様は遠く中標津から来て下さり、ご講義の中で「全ての人を大切に作る人の道・生き方を心にとめ、常に笑顔で子どもたちとかかわりなさい」と話されました。その後、夕食を共にし親睦を深め、楽しい一時を過ごしました。第二講義は、留萌聖園幼稚園の大長先生より「聖書とカトリックの教え」について学びました。夜は、藤大の広い体育館でミニバレーボール大会をして体を動かし汗をかきました。小聖堂で声を合わせて夕の祈りを唱え、各部屋に戻って入浴し一日目を終わりました。

第二日は、六時半起床、朝の祈りを終え朝食で一日の元気を作り、第三講義は函館藤幼稚園長のシスター下野より「宗教教育の実践について」を学びました。シスターは、子どもがより良い人間に成長するのを助けるため、祈りと聖歌を通して心の中におられる神様に気付かせ、目に見えないものにも目を向けさせる保育者の姿を通して、神様が常にあなたと共にいることを子どもたちに感じさせることの大切さ、礼拝、賛美、感謝と願いのある祈りの姿勢、手を合わせて心を暖かくし神の声を静かに聞くことの大切さを聖書の箇所を引用しつつ話されました。第四講義は前の講義に続いて「宗教教育の実践について」を俱知安藤幼稚園の千葉先生が話



北カ幼新任教諭研修風景

されました。プリントが配布され、それに従って幼稚園の日課の祈りの時間帯の説明があり、育つ中で祈りを大切にすることは環境作りにも係るとのことでした。続いてミサに全員参加し心を合わせて祈りました。お説教で鈴木神父様は、広く世界に目を向けて食べる物のない子どもたちへの思いやりと暖かい心を持つ事の大切さを話されました。ミサ後、食事と談笑を楽しみ、午後の部に入りました。

第五講義は、札幌藤幼稚園長のシスター白井による「実習」で、前半に「子どもは両親の姿第二の社会である幼稚園の保育者の後姿を見て育ち、自立し主体的に生きることを学んでいく。保育者は指導するのではなく協調し援助する者だ。」という説明がありました。そして、そのための手段として後半の実習があり、折り方、切り方、縫い取りなどの手先を使っている作業があり、それらは子どもの選択する心と専心する心を養うということでした。

第六講義は、苫小牧藤幼稚園長のシスター渡辺による「教職員の仕事について」を聞きまし。子供が好きと言っただけでは保育者になれないということ。子どもと共に成長しようとする姿勢をもち、祈り、感謝し、詫び、許すこと。人間の力を越えた方への希望と、そこから生まれる笑顔、挨拶、誠意の心を大切にしてい。日々、子どもの前に暖かい心を示し、品位を保ちつつ子どもの自立成長を援助すること。人間としての土台をしっかりと築いてあげていくことを

話されました。第七講義は、北見カトリック学園理事長の加藤先生による「勤務規定について」でした。これから幼稚園の組織に所属して勤務をはじめるとなると、規律や規則の契約関係によって職務上の命令に従う義務等を遵守すること、学生気分から脱皮し社会人としての責任ある態度を保つこと、人との係りの中で神を常に心にとめて行動すること、特に子どもたちと父母との係りに誠意をこめて対応すること等プリントを用いて法律的側面の説明をされました。夜のレクレーションは歌と手遊びゲームなどで、若さと爆笑で盛り上がり楽しい一時を過ごし、夕の祈りで二日目を締めくくりました。

最終日は、過ぎた二日間の好天と打って変わって雪混じりの雨となりましたが、全員で感謝の心で朝の祈りをしました。第八講義の留辺薬マリア幼稚園長の戸部先生による「実践・保護者との接し方」では、それぞれの地区から一人ずつ先生が選ばれ、研修委員が保護者となつて対応する実習がありました。保護者にとって子どもは大切な存在なので、子どもたちへの誠意ある係りは勿論のこと、保護者に対しても誠意を示すことが必要だと戸部先生は話され、全講義が滞りなく終わりました。

冷たい雨のため、バスでセミナーハウスからマリア院聖堂へ移動して、司教様のミサに参加しました。ミサの中で司教様は、「カトリック幼稚園の保育者は、子どもの成長への奉仕の心が必要であり、それを心に留めて日々

子どもとの係りを大切にしてください。」と話されました。ミサに続き閉会式が行われ、二泊三日の新任研修会を全員無事に終了し、四月からの子どもたちとの係りに希望溢れてそれぞれの地へと帰っていきま。研修委員の全ての先生方も、新しい先生方がより良いカトリック幼稚園の保育者に育っていかれるように心を込めて祈り、新任研修会の責任を終わりました。(北カ幼 研修委員)



レクレーションで楽しむ先生たち

**青年たち  
スタディーツアーを体験**

**フィリピンの人々との出会い**

札幌教区青少年部会では、毎年十日前後の日程で、青年たちがアジアの国々を旅するチャンネルを作っている。これまで毎年十人前後の青年が参加し、フィリピン、カンボジア、ベトナム、韓国を巡り「アジアの歴史」「平和と戦争」「開発と貧困」等について自分の目で学んできました。5回目の今年、3月2日、10日、8人の青年とベテラン神父

と共に、フィリピンのマニラとミンダナオを訪ねた。旅の行程は、マニラでフィリピンJOC(カトリック青年労働者連盟)の青年たちと交流。その後ミンダナオへ飛び、イスタービレッジに滞在。子どもたちとの交流を深めながら、祐川神父や中島さんの案内で、少数民族のピラアン族の村を訪ねたり、かつて出稼ぎ労働者として日本に滞在した方々と出会い、日本へ行った経緯やその後の生活事情などについて伺うという機会もあった。また最終日には、マニラで佐藤宝倉神父が関わりを持つ聾啞者たちの歓迎を受け、彼らの寮に一晚お世話になりました。盛りだくさんの経験をしたのですが、いくつか印象に残っていることをご報告します。

悪化するフィリピン経済事情 私たちが出発するちょうど一週間前の2月24日、軍部のクーデターを恐れたアロヨ大統領はフィリピン全土に非常事態宣言を発令した。給料は変わらないのに、食費も交通費もアップし、この2月には付加価値税が10%から12%に引き上げられた。一日1食しか食べられない人が33%以上いる。これに対し抗議の声をあげたいが、大統領は街中で抗議行動を禁止した。(フィリピンJOC)

フィリピンの経済状況は、マルコス時代よりもますます悪化したと言われ、生きるための選択肢として、毎日1500人が海外へ出稼ぎに行くといわれています。もう一人で悩まなくてもいいマニラで出会ったベディキヤ

ブ(サイドカー付き自転車タクシー)ドライバーの青年が彼の経験を分かち合ってくれた。『朝5時半から夜8時過ぎまで、15時間くらいへとへとに疲れまでペダルをこぎ続けている。でも車のレンタル料50ペソを支払うと収入は一日150〜250ペソ(360〜600円)。インフォーマルセクターだから何の補償もないことがいつも不安だった。でもJOCと出会って、僕たちはグループを作った。そのグループを正式に登録することで事故のときの補償を得ることができた。パランガイ(地域住民組織)でも僕は認められるようになった。もう、一人で悩むことはなくなつた。JOCと出会って労働者には権利があることを知った...』

と。ほとんどの人が権利について知らされていない中、JOCはまずそれを伝えようと努力していた。そして、もう一人で悩まなくてもいい...』という彼の言葉がいつまでも私の心に響いていた。一人の労働者にとってこれほどの福音はないのではないかな。生きることを学ぶ

ミンダナオ島ダバオ市から車で2時間、内陸部へ入ったキダパワン市郊外にイスタービレッジがあります。そこは施設というより、フィリピンの大家族のひとつという印象を受け、子どもたちのほとんどは小学生だが、小さいながら素晴らしい紳士淑女たちでした。私たちが到着すると、彼らは駆け寄ってきて私たちの手を取り、その手を彼らの額に当ててフィリピン流の心を込めた挨拶を一人一人にし、気がつくとも男

の子たちは私たちの重いバックを、小さな背中に肩に担ぎ、次々と建物まで運んでくれた。また食事のテーブルを囲むと、まず自分以外の人の皿に取り分けたり、取りやすいように皿を引き寄せてくれたり、いたれりつくせり。同じ年頃だけで固まることもなく、小さな子どもたちの面倒を見ながら食べている。こんな気配りがとても自然にできるのである。もちろん、彼らの父親代わりである祐川神父やスタッフたちの根気強い愛情をもった関わりのおかげであることは言うまでもない。子どもたちは日々の生活の中で、人間としての生き方を学び取っていると感じました。

最終笑顔の子どもたちに接していると、一人ひとりが本家の家族と暮らせない様々な現実を背負っていることを忘れてしまいがちだ。「一度子どもたちの間でダレが一番かわいそうかと話しているのを聞いた。すぐに子どもたちを集め、この中でダレが一番かわいそうなのか?食べられるし、住むところもある。もっとかわいそうなののために働ける人になろうと話合った。」というエピソードを祐川神父が話してくれました。

イスタービレッジの広い手入れの行き届いた芝生の中に、ごっこつした不思議な岩がある。庭を造るとき、この岩は邪魔なので取り除こうという意見があったが、結果的にこれを残し、みんなでビー玉を埋め込み小さな花を植え込んで飾った。美しく飾られたこの岩は、今やイスタービレッジのシンボルになっ

た。私はその岩のことを忘れな  
いでいたい。どんな姿をしてい  
てもこの世に必要とされないも  
のではないんだ！と……  
「子どもたちには夢を持って  
欲しい。この国の大統領になっ  
てくれ！」と祐川神父は言っ  
ているそうだが、たしかに貧困と  
孤独のつらさを十分に経験し、  
そして今素晴らしい家族と共に生  
きている彼らこそ大統領にふさ  
わしい！と私も思いました。



最後に  
旅の途中で、参加した青年た  
ちは多くのことに気づいていた。  
「子どもたちから元気をもらっ  
た」今、精神的に満たされてい  
る。「子どもたちの態度を見て、  
私たちは自分の幸せをまず優先  
しがちであると思った」「気が  
つけば人とコミュニケーション  
をとれず警戒心だけ強くなって  
いた自分を意識した」など。こ  
の体験を踏まえて、日本の現実  
の中でどう生きるか、青年たち  
と共に悩みながら歩みたい。  
最後に、私たちの旅の実現を  
支えてくださっている札幌教区  
に心からの感謝の気持ちを伝え  
たい。  
(札幌JOC協力者 鳥居 明子)

**カリタス家庭支援センター  
2005年度の活動報告**

代表 堤 邑江



コンサート後の分かち合い

カリタス家庭支援センターは、  
小教区・市民の皆様始め、カト  
リック札幌教区、札幌カリタ  
スならびにカリタスジャパンの  
ご支援を頂き、2005年度の  
活動を順調に進めることが出来  
ましたことを感謝と共にご報告  
いたします。  
2005年度は、札幌司教区  
のご支援を頂き、専門の相談員  
を一名増員して、支援体制を強  
化し、年間665件の相談に応  
えることができました。またス  
タッフをボランティア保険に加  
入させることも出来ました。  
また、札幌カリタスの援助で、  
相談室と事務室の一部の壁紙を  
貼り替え、訪れた方が心地よく  
過ごせるようになり、さらに新  
たに向かえたスタッフの事務机  
椅子等の備品も補充して、環境  
を整えることが出来ました。  
そして、カリタスジャパンの

助成をいただいで、看板・掲  
示板・方向表示板が設置できたこ  
とで、来所が容易になり、さら  
に喫煙の多い集会所のあとに使わ  
れるホールと面接室に空気清浄  
機を設置することが出来ました。  
開所当時から熱心な後援活動を  
して下さる「カリタス支援コン  
サート実行委員会」から、今年  
もコンサートの献金・バザーの  
収益金のご寄付をいただき、こ  
こに紙面を借りまして御礼申し  
上げます。  
現在のところ相談・支援活動  
を中心に活動しておりますが、  
2005年度の件数は見込み件  
数を超えた665件、北海道全  
域、東京、千葉、群馬、静岡か  
らも相談が寄せられ、広域化し  
ています。

相談から派生するニーズへの  
対応として、2人の方が路上生  
活から離れることが出来ました。  
その支援に当たって、役所、病  
院、地域保健センター、助産施  
設、プロテスタントの方、当セ  
ンターのボランティア、最寄り  
の小教区の方の応援もいただい  
で、支援ネットワークを作るこ  
とができました。教派を超えて、  
小教区を超えて、地域社会の人々  
と共に、生活を支える実践活動  
の広がりが出来てきました。  
来所された方のご希望によっ  
て、ともに安らぎの時を過す  
「イエス様と出会う集い」(火曜  
日午前)と、「絵手紙の集い」  
(木曜日午後)が発生し、利用  
者の方に喜ばれています。  
当センターの活動を紹介する  
「カリタスの風」を3回発行し、  
小教区の皆様にお届けしました。  
カリタス家庭支援センターの活

動が、地域社会の中で切実な生  
活問題を抱える方々を支援する  
教会の社会福祉活動として今後  
も続けられますように、皆様の  
ご理解・ご協力・ご支援をお願  
いいたします。  
カリタス家庭支援センターの  
活動を皆さんに、より知ってい  
ただくために名刺大のカードを  
作成しました。各小教区にお配  
りしてありますので、ご紹介し  
て頂く方がいらつしやいました  
らお渡し願えれば幸いです。

援助内容	合計
面接	374
機能説明	194
社会資源	40
情報提供・収集	167
代弁・代行	42
方針協議	66
問題整理	342
家族調整	72
生活介助	23
連絡	148
助言提供	47

援助内容

面接：普通の面接。  
機能説明：援助体制、相談機  
能等の説明。  
社会資源：制度・機関など地  
域社会資源の紹介等。  
情報収集：進捗状況に合わせ  
た情報提供、様々な情報収集な  
ど。  
代弁代行：相談者に代わって  
実際に公的機関につなげたり、  
書類等の作成・提出を代行する。  
方針協議：支援関係機関等と  
今後  
問題整理：相談者の理解・現  
状分析を援助。  
家族調整：家族の関係調整。  
生活介助：実生活に関する諸  
援助。  
連絡：単純な連絡等家族調整  
助言提供：関係機関、援助者  
からの求めに応じて専門的な助  
言を行う。

援助内容の説明

相談方法

相談	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来所	21	10	16	20	14	11	12	14	25	22	15	19	199
電話	16	19	31	44	36	38	51	45	33	28	33	36	410
訪問	3	0	2	1	2	1	8	21	5	6	1	6	56
計	40	29	49	65	52	50	71	80	63	56	49	61	665

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
新規相談(人)	27	24	33	23	28	22	27	27	25	26	11	28	301
繰越相談	4	3	3	7	12	12	6	2	3	7	10	10	79
相談人数	31	27	36	30	40	34	33	29	28	33	21	38	380
終結	28	24	29	18	28	28	29	25	23	23	12	32	299
次月継続	8	8	7	12	12	6	4	4	5	10	9	6	81
総数(件)	40	29	49	65	52	50	71	30	63	56	49	61	665
カトリック件)	15	13	14	10	21	15	10	12	10	15	11	18	164
一般(件)	25	16	35	55	31	35	61	68	53	41	38	43	501

相談件数

持ち歩きやすいカードを作成し  
ました。小教区にお配りしてあり  
ますので、ご利用なさりたい方にお  
渡し頂ければ幸いです。



紹介カードが出来ました

地域別相談者数	相談者数
札幌市	532
北広島市	28
小樽市	11
江別市	8
帯広市	6
様似町	6
中川郡	5
稚内市	4
三笠市	4
旭川市	4
北見市	2
石狩市	1
砂川市	1
滝川市	1
苫小牧市	1
千歳市	1
紋別市	1
中標津町	1
道内	617
道外	48
計	665
静岡県	33
茨城県	4
横浜市	3
千葉県	3
大分県	2
東京都	1
名古屋市	1
兵庫県	1

教会関係	相談者数	割合
(信者44人・一般市民27人)	71人	23%
他機関	71人	23%
パンフレット	11人	4%
新聞	9人	3%
知人・友人	23人	8%
電話帳	15人	5%
PCネット	6人	2%
再来	95人	32%
計	301人	100%

紹介経路

人間関係	相談者数	割合
保健・医療	91	14%
法律・経済	66	10%
進路・人生	157	24%
生活援助	126	19%
その他	43	6%
計	665	100%

相談内容

